

五伊井蓉峯

藤澤が主宰する俳優学校の生徒には本
郷座を一日丈け見せることになつて居る

去年の八月横濱の喜樂座で、山崎紫紅氏作の「桶狭間」を出した時、伊井は信長に扮した、初日に伊井の信長が出陣に際して舞を舞ふ件で木村操のおオの方がワキを勤める、元來踊りの素養のない木村だからワキと云つても變な格好をして舞臺をクル／＼廻はる許り、其内に信長はイザ出陣となつて襟首へ珠數を掛け様とすると、珠數が冠に引つ懸つて遂々伊井のおかんむりを本當に曲げて了つた、それに月岡は鑑が廻はらないので出場になつても素つ裸で樂屋中を飛むで歩いて大間誤付き、舞臺では伊井が冠を引きしつて抛り出す、遂に一幕有耶無耶の裡に葬つて了つた。樂屋に引つ込むと伊井は餘憤尙去りやらず、木村をハツタと許り睨み付け、「何奴も此奴も食物が悪いから仕様がない、少しは甘いものを食へつと、本役の信長が怒りし時はさもこそと思ひやられて物凄かりける次第なりしと人の噂。

本間久著

去年「御安堵」の時も或日生徒一同に見物させた。芝居が打出してから一同藤澤の部屋に挨拶に往つた、すると藤澤は生徒に向つて、俺の今日の舞臺で何處が一番好かつた、と聞いた、一同は御挨拶に恐縮して互に顔を見合はせたつ切り無言で居る、藤澤繰り返して聞くけれども誰一人答へない、先生少しく業を責やし「察する所君達は芝居を見て居なかつたナ、夫れで何處が好いか悪いか判らんのぢやらう」と極め付けると、生徒一同は言ひ悪く相に、「夫れでは申しますが、先生の何所も甘いと思つた所はありますんでした」とキツバリ云はれたので藤澤もグツと參つたが、負けしみは何處迄も強ひ、甘くないのは當り前だ、俺が甘くないから學校を建てたのだ、俺を見習へ」と云やせん」。



高橋迎月

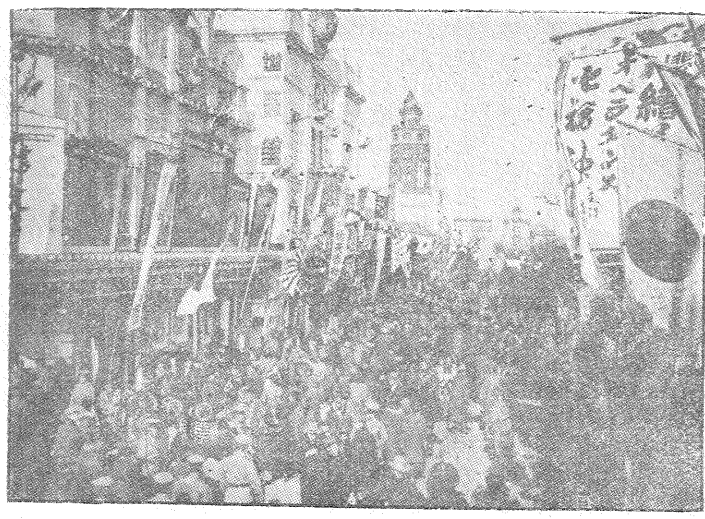
寄席や芝居其他のあらゆる観覽物を壓して、相變らず全盛を極めて居るのは、市中の活動寫眞だ。取分け全盛な淺草公園には、此一月から新に日の出館と云ふのが出来たが、此館の呼物は朝鮮官妓の舞踊だ——吉原の角海老で、店から出さうとしたのを、其筋で許可しない爲めに廻り廻つて此館へ現はれたのだと云ふ評判もあるが、軒を並べる各館との競争上餘興がなくては鳥渡客足を附かない此土地の事だから、此館でも兎に角之が呼物で、相應に客足を引いて居る。三萬五千餘圓を投じて、市中第一の模範的定設館を、造り上げると云ふ觸込の帝國館も、此月の中旬から開館する段取りとなつて居るさうだ。日の出館の寫眞は福寶堂持帝國館は吉澤持だが、大勝館や世界館大幸館杯の關係者の大勝も、番頭の青江

て元^{もと}のMバターの梅屋^{うめや}と一所^{いしょ}に、相場^{さうば}に手^てを出^だして失敗^{しはい}したと傳^{つた}へられたが、手^て疵^{きず}も評判^{へいばん}程^{ほど}でなかつたと見^みえて、活動^{くわつどう}寫^{しや}眞^{しん}の經營^{けいえい}には一向^{いこう}に差支^{さしつか}へはなく、相變^{あひかわ}らず客寄^{きやくきよ}手段^{しゅんげん}に油斷^{ゆだん}が支^さい。Mバターの梅屋^{うめや}は失敗^{しはい}して、合資會社^{がしけい}のMバターは一旦^{たんぱん}解散^{かいさん}したが、其跡^{そのあと}は直ぐと一錢蒸氣^{せんじやうき}の古川^{ふるがわ}幸七^{しやうしち}に引受^{ひきう}けて、Mバターは相變^{あひかわ}らず昔^{むかし}の儘^{まま}に營業^{えいぎやう}を繼續^{けいぞく}して居る。梅屋^{うめや}もこれに依^よつて、バターの番頭^{ばんとう}として復活^{ふくわつ}の途^{みち}が開^{ひら}けたと云^いふ話^{はなし}だ。這麼^{こんな}始末^{しまつ}で、公園^{こうえん}の活動^{くわつどう}寫眞^{しやしん}は、寫眞^{がしやしん}の側^{がは}から云^いへば吉澤^{きちざわ}横田^{よこた}バター大勝^{だいしやう}杯^{はい}の競争^{きやうそう}場裡^{じやうり}であつたのが、今度^{こんど}新^{あらた}に福寶堂^{ふくほうどう}が此土地^{このち}へ手^てを延^のばした譯^{わけ}で、此所^{このところ}の活動^{くわつどう}寫眞^{しやしん}は、之^{これ}から一層^{いっしやう}發展^{はつてん}すべき機運^{ききうん}に向^{むか}つて居る競争^{きやうそう}の結果^{けつが}は、寫眞^{しやしん}なり餘興^{よきやう}なり、より多く改善^{かいぜん}されて行くのは云ふ迄^{さき}もない事^{こと}

なのだ。
淺草公園が觀音様の公園か、活動寫眞の公園かと云はれる如になつたのも、此の競争があつたればこそだが、我國の活動寫眞界で吉澤横田バナー杯と、夫々一方に割據して指を折られる如になつたのにも、何れも競争的に奪闘した徑路があるのだ。吉澤商店が定設館のオーソリチーと自負して居る、公園の電氣館を創めた事は、今では活動寫眞を見る誰でもが知つて居る事だが、京都を根據として居る横田商會は、別に横田兄弟商會と云ふ佛國から染粉の輸入販賣を營つて居る店があるの、蓄音器屋から活動寫眞屋となつた、佛のバナー商會から、逸早くヒルムの直輸入を試みた。而して此嶄新なヒルムを持つて、京都大阪は云ふ迄もなく、關西から關東迄も巡業して、其頃は何れの地方でも、物珍らしさに歡迎された。一體横田は興業師上りだと傳へられた程ありて、至つて實踐主義の人で、自分ば勿論家族總出で興行を營ると云ふ風なので、巡業に成功したばかりか、京阪方面の假設興行にも、續々成功して行つた所が、夫迄は新嘉坡から上海邊で興

行して居た、Mバターの梅屋が、四十一年頃、漂然神戸に現はれて、横田の向ふを張つて巡業を始めた。之こそ横田に取つては大の強敵で、横田は質素で實踐的なのに、梅屋は華美な太腹な遣口なので横田はそれが爲めに大打撃を受けた。吉澤も一時は關西方面へ手を延ばしたが、之も巡業は失敗に終つたと云ふ話だ。何にせよ地方巡業は、一隊の人数幾十人の旅費も要れば食費も要る。一場所良くても次場所が悪ければ、随分と危険な境遇に陥らなければならぬ。其次も其散の悲運に陥らなければならぬので、夫と見て取つた梅屋は、ズーツと東京へ乗込んで、其頃公園には電氣館や三友館が、人氣を集めて居るのにも拘はらず大勝や青江と結び附いて、大勝館紀念大勝館の旗上げをして、公園一派の勢力を利用して、電氣館や三友館に對抗したのだ。夫と前後して、横田も富士館へ打つて出たのだが、小屋は何れも大勝と青江とか云ふ公園地附の人々か、附近の地主連の持物で興行の實権は、夫等の人々の手に握られて居るのだ。で、特

別の事情のない限りは、各館の収入は總ての出費を差引いて、大抵折半と云ふ事になつて居る。が之は、館主と寫真屋の異なる場合で、館主側では寫真屋側に、公園を蹂躪されるのも残念だと云ふ如な感情も伴つてか、大勝一派では自身で撮影も始めた始末で、外國のものも他の手を



淺草公園奥山の活動寫真館

經すとも、手に入れる事の出来る手順になつて來て居るさうだ。で、同じ公園の同業者の内でも、現に、大勝さん一派は獨占で甘いもんです。と寫真屋側の關係の薄いのを羨んで居る向もある。夫は兎に角、這麼次第で公園の活動寫真は寫真屋側と寫真屋側の競争の外、館主側と寫真屋側の競争の意味も、含まれて居るかの如に見受けられる。が、其所には又、裏面に立つて調和を圖る向もあつて、表立つて角目を現はさずに、競争は爲ながらも、圓滑に發展して行けると云ふ譯なのだ。雖然、電車に乗つて活動を見に行くでもない、と云ふ如な遠方の人々には市中の定設館も亦必要だ。一項其筋では、假設の活動寫真や定設館を、市中の其所からも此所からも出願するのを、取締の上から、假設興行にも制限を附けるし、定設館は今後相當の設備をなし得るものに限つて、市内八ヶ所のみ許可すると布達した。夫も畢竟、其所からも此所からも、定設館の設置願が出たからだが、夫等の出願者を妥協して、四十二年中に其權利を掌中に納め得たの

が、九州選出の某代議士なのだ。而して其權利を十幾萬圓を投じて譲受けたと傳へられるのが、此元旦に芝櫻田本郷町の第二と、本所若宮町の第八を開館して、全部八ヶ所の開業を了つた、卅五萬圓の合資組織の福寶堂で、出資者の顔觸は、北岡文平の息だと云ふ田端健藏、高見之通、賀田金三郎、北岡文平杯が重なるものだ。

尤も、市中の定設館は、其外にも十五六ヶ所あつて、其中約三分の二がバターの梅屋の開拓した場所、其後吉澤から寫真を提供するようになった處もあるが、今尚は數から云へば、バターが第一吉澤第二、横田第三と云ふ順にならう。其所で福寶堂は、元横田の東京出張所の主任で、淺草の富士館の擔任者であつた、小林某が入社して、經營の任に當つて居るので、之が福寶堂では斯界の経験の最も深い人なのだ。で、計畫も漸次歩を進めて、日暮里に撮影場も出來た。今では海外からヒルムを直輸入する途も開けた。と云ふ話だから、八館が残りす完備した今日以後は、華々しい發展をする事であらう。現に淺草公園の外、吉澤横田

バターの如に、京阪方面の定設館にも手を擴げつゝあると云ふ事だ。夫に模範定設館と銘を打つて出て居るだけに、各館の構造、換氣法杯に就ても、公園の或物よりは完全だと稱へて居る。現に新に開館した芝の第二杯には、貴賓席の設けもあつて、貴紳連の觀覽にも、差支へないと云ふ事だ。が、根が興行物の事であるから、市中と云はず公園となく、手擴く行つて居るもの、内には、種々な遺線話が横はつて居るのだ。が、那麼詮索立は今度は先づ罷めにして、公園と市中の各館を、大體の上から比較して見ると公園は今でも既に、活動寫真の公園として、日に月に同一の歩調で發展の歩武を進めて居るが、市中の各館は公園程に統一が附いて居らぬ。とは或黒人筋の語ることだ。全く市中の各館は、館と館との距離も離れて居るし、公園の如な組合の設備もなし、今の所では亂軍の體に見える實際公園とは比較されまい。雖然、亂軍なればこそ、其間の功名争ひも却々旺なもので、福寶堂の各館杯では、土地に依つて入場料も、最下等は五錢七錢杯に引下げて、最寄々の客を一手に引寄せ

る策を講じて、一方には公園の各館に對峙して居るのだが、入場料ばかりではない、市中では公園の如に、一日に幾回も興行する程客は呼べないので、最初から一度にドツと客を呼ぶ策を取つて、公園の各館が、餘興は別として四本か五本のヒルムを使ふのに對して、八本乃至十本を寫して居る。それに、公園に對する市中の各館の暗闘も凄じいものだが、市中の各館では、客の頭數の上から餘興杯を出しては、勘定が附かない、市中の各館の互に其邊の競争をしないのは、興行の上から云つて、未だ確かに、公園に一步を先じられて居るのだ。が、何にしても寄席や芝居が這入るとか這入らぬとか、毎時も大騒ぎをやつて居る間に立つて、絶えず相應の客足を引いて、景氣の可いのは之ばかりで、發展するに連れて、未だく改善すべき餘地は澤山あらうが、云ふ迄もなく市中の活動寫真の前途は、頗る非常に有望なのだ。

